



全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.36 (Oct. 2018)



秋吉台を散策するエクスカージョン参加者（山口県美祢市）

第 12 回理事会・総会が開催されました

2018 年 6 月 24 日(土)～25 日(日)、山口県美祢市で、全国草原再生ネットワークの第 12 回の理事会・総会、それに先だつてのエクスカージョンが開催さ

れました。

当日の様子について報告します。

理事会・総会の報告

(ネットワーク事務局)

平成 30 年 6 月 24 日、山口県美祢市 赤郷公民館で第 12 回全国草原再生ネットワーク理事会および総会が 26 人(うち委任者 15 名)の参加を得て開催されました。

まず、事務局から平成 29 年度の事業報告・決算報告がなされ、一部の文言、表記の訂正のもと、全員一致で承認されました。しかし、5 月に宮崎県で第 12 回全国草原シンポジウム・サミット in 串間・川南が開催された直後とあつて、様々な意見が飛び交いました。中でも、①2 つの行政の共同開催のむずかしさを感じた②今後、湿地を草原として取り込んでいくためにある程度の論議が必要ではないか等、課題が上がりました。

②については、今までも渡良瀬湧水地等の例がある、最初から枠を決めずに繋がっていき、問題が生じた時に解決して行くべき、という意見に集約されました。また、会員が転勤などに伴って住所不明になり、会費納入額と予算とのかい離が起こり、運営的には問題が生じている点については、ニュースレター発行に合わせ、定期的にチェックの必要があると指摘されました。

平成 30 年度の事業計画と予算についても議案書のとおりそれぞれ事務局から提案され、活発な議論がなされました。その際、草原データベース担当者から、草原の特徴を一目で見えるようにしたいが、サーバー移転等の問題で立ち止まっている等の悩みが話されました。また、最近全国各地で多発している野焼き事故に対して、行政間の考えの違いや、デリケートな問題を含んでいるため、情報を収集できないことが多い。その上、2004 年に作成したヒヤリ・ハット集への追加応募もない事から情報収集の手段についての議論がされました。現在の情報収集と拡散の手段として、インスタグラムとツイッター・ライン、最後に HP に行きつく、という方法が有効。このツールの組み合わせでヒヤリ・ハット集

を元の一つの形を作り、野焼き事故版・草刈り版・除草版・輪地切り版という流れを作り、ひいては草原データベースの充実につなげる、との話となり予算付けすることとなりました。

これからの事業の推進のためには当ネットワークと「全国草原の里市町村連絡協議会」:(以下、自治体間ネットワークと略する)が両輪となるべきと参加者全員が共有し、その具体的な方策を議論しました。「草原の価値」や「草原 100 選」の実現には自治体間ネットワークへの積極的関与が不可欠であり、会員増強のため具体的な数値目標を掲げ、加入を進め易くするための入会グッズの提案や、当ネットワークが自治体間ネットワークに対してできることを明確に示すなど、事務局会で話を詰めて一定の方向性をだすことにしました。

また、草原サミットへの市町村の参加要請の動きと自治体間ネットワークへの加入を促す動きが連動するように、次回の総会は第 13 回全国草原サミット・シンポジウムの開催事務局となる東伊豆市となりました。このように他の諸団体と連携が見込まれ、また大きく躍動しなければならない来年度は規約改正をする必要があり、来年の総会に提出することになりましたが、その他は事務局案通りに承認され、すべての日程を終えました。



エクスカージョンの報告

(ネットワーク事務局)

総会・理事会に先立ち、6月23日に、山口県美祢市の秋吉台の草原で、エクスカージョンが行われました。当日は、秋吉台科学博物館の太田陽子さんの案内で、秋吉台科学博物館の見学、長者ヶ森周辺の草原見学を行いました。

秋吉台科学博物館では、まず入口付近に、秋吉台から産出したヤベオオツノジカの全身骨格が展示してあります。以前行った際には無かったのですが、新たに、秋吉台の石灰岩がどのようにできたのか、映像による紹介がありました。以前に比べると、ジオパーク関係の展示が充実している点が目を引きました。

展示室内には、石灰岩地ならではのドリーネ、ウバーレなどの地形の紹介もあり、この後に野外を歩く際の参考になりました。また、洞窟内のコウモリ類や、暗闇の中で生活するため目が退化した動物などの紹介もあり、見応えがありました。

長者ヶ森の駐車場まで車で移動した後、草原などの散策を行いました。そこでは、秋吉小学校の児童が草刈りを行っている場所や、セイタカアワダチソウの刈り取りを行っている場所がありました。前者

の草刈りが行われた箇所では、周辺に比べて草丈が低く、開花した植物が多く見られました。草刈りの効果がひとめで分かりました。後者では、年に2回の刈り取りが行われており、とくに刈草を持ち出している箇所では、ススキ、ネザサ、チガヤの量が増えており、セイタカアワダチソウを抑制する効果が上がっている様子でした。

途中、長者ヶ森の中も歩きましたが、タブノキやカゴノキなどが鬱蒼と茂った常緑広葉樹林でした。どうして森が残っているのか、原生のものか人工のものかは不明ですが、草原の中にこんもりとたたずむ様子は、独特の雰囲気がありました。

その後も、遊歩道を歩きながら、秋吉台の景観や初夏の草花を見ながら、散策を続けました。途中では、草刈りが行われている背丈の低い場所では、カキランやノハラテンツキといった希少植物が見られ、あらためて草刈りにより多様な種の生育が保たれていることを実感しました。冠山からは、たくさんのドリーネが連なった景観が楽しめました。

最後になりましたが、お忙しい中、案内下さった太田陽子さんにお礼申し上げます。



長者ヶ森の様子

科学博物館内より秋吉台を望む



秋吉小学校の草刈り場



冠山での記念撮影

各地からの報告

第9回茅葺フォーラムが鳥取県大山町で開催されました（増井大樹：岡山県在住）

2018年6月16日、17日に日本茅葺文化協会第9回茅葺フォーラム「伯耆国の茅葺-弥生の里にルーツを探り未来を考える-」が鳥取県大山町にて開催されました。

お昼過ぎより大山公民館にて開かれたフォーラムは今年宮崎の草原サミットでもお世話になった宮崎公立大の永松敦教授による「茅葺きと茅場 一技術と継承の伝承」と題した講演から始まりました。ご自身の幼少時代の原体験の話（民家の事をわらぶき屋根と呼んでいた事）や、五箇山や白川郷では屋根ふきの材料がカリヤスで、カリヤスの茅場は焼畑と関係していること、宮城県の北上川河口ではヨシがススキなど他の茅材よりも強いとされ、ヨシが屋根葺きの材料として選ばれていることなどが説明されました。このような地域ごとの文化や自然環境に根差した茅葺き技術が多様な茅材の選択につながっていることから、茅葺技術や文化の継承のためには、その材料の茅場（草原）やそれらを支える集落の生活と共に継承していく必要があることとお話いただきました。これからの茅葺や草原の維持のために、「もう一度原点に帰って、自分たちの集落はどのようなべきか、次世代にどのような集落を伝えていきたいのかお考えいただければ」という永松先生の問いかけがとても心に残る講演でした。

続いて大山町教育委員会の野口様より「開催地紹

介-伯耆国大山北麓地域の歴史と文化」という題目で大山町の概要やその文化、特に日本遺産として平成28年に認定された「地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」として、明治時代には日本最大の牛馬市がこの大山町にあったことが説明されました。その後、鳥取県立むきばんだ史跡公園の高尾様より「弥生時代の茅葺建物 妻木晩田遺跡の調査整備成果から」として大山山麓で大山町にある国内最大級の弥生時代の遺構である妻木晩田遺跡の紹介があり、竪穴住居には茅材が使用されていた事もあり、住居の復元には三瓶山周辺で確保した茅を使用したことなどが紹介されました。また、茅を葺く職人が鳥取県内に少なかったことも課題であるとの事でした。

最後に私より「草原の再評価と再生の課題」という題目で、草原の価値が茅葺きの材料の確保の場所だけではなく生物多様性保全など様々な価値がある場所であること、人と草原のかかわり方を現代的に見直すことが大切であることをお話ししました。

演者全員と茅葺文化協会代表理事の安藤先生を交えたパネルディスカッションでは茅葺業者の方から「茅材がとれる場所が少なくて困っている」との意見等も出され、草原再生草原再生ネットワークの会員の方が管理する草原と茅葺職人がつながることで、保全と利用のどちらにも良い関係が築けるのではないかと感じました。



阿蘇の草原保全：「草原再生募金」による支援成果の報告会について

(木部直美：熊本県在住)

阿蘇草原再生募金の発足経緯

2005年に設立された阿蘇草原再生協議会は、阿蘇の草原保全において、地域の畜産農家や牧野組合、行政等の関係団体、研究者等様々な主体が「協議会」という大きなテーブルを囲み、連携を生み出す場となっています。その一方で、「会議ばかりをしていて地元メリットがあるのか」という思いもあり、草原再生の効果を実感でき、そして地元の方々が元気になる仕組みを検討する中で、2010年「阿蘇草原再生募金」がはじまりました。

募金いただいた方へお返しを

募金を集めて活動している以上、募金者に対しきちんとお返しする責任と義務があります。そこで、第3期募金活動（2016～2018年度）の最終年度である本年8月31日、熊本県阿蘇市の阿蘇草原保全活動センターにおいて、3年ぶり2回目となる募金を活用した草原再生活動の報告会を開催しました。当日は募金に協力いただいた方をお招きし、協議会構成員の見守る中、これまでの募金活動の概要報告や代表的な6つの活動事例報告を行いました。これらの報告は、募金の活用方針を反映し、多様かつ地元も関係者も共に元気の出る内容となりました。

1. 阿蘇草原再生募金の概要報告

はじめに、阿蘇草原再生募金のこれまでの取り組み概要、第3期募金活動の状況を募金事務局よりご報告しました。

開始当初、募金は順調に集まりましたが、2011年の東日本大震災等、8年の間に数々の災害に見舞われたこともあって、企業団体や個人からの募金は徐々に減少傾向にあります。しかし、継続して支えてくださる募金者もあり、2018年7月末までの募金総額は約1億3千9百万円となりました(下表)。

<これまでに集まった募金>

期	期間	募金件数と金額	
第1期	2010年11月～ 2013年3月	4,092件	70,385,083円
第2期	2013年4月～ 2016年3月	764件	32,591,007円
第3期	2016年4月～ 2018年7月末	302件	36,115,347円
計		5,158件	139,091,437円

集まった募金の活用方法としては、募金開始の翌年2011年度より、協議会構成員が取り組む草原再生活動への助成がスタートしました。

助成の原則は、以下の3つです。

<募金による助成の原則>

- ☆実質的に阿蘇の草原の保全につながる
- ☆地元が元気になる
- ☆募金者にわかりやすい（貢献が目に見える）

<直接的な活動支援の内容：2011年度～2017年度>

支援項目	支援額（円）	成果
繁殖あか牛導入助成 (1頭当たり6万円を助成)	28,860,000	481頭の繁殖用あか牛の導入助成
野焼き放棄地の野焼きを再開 (ヤブになった草原の再生)	6,000,000	132haの草原を再生
野焼き支援ボランティアの養成と派遣	24,000,012	約16,000名の野焼き支援ボランティアを派遣
その他： 生物多様性保全や草原環境学習等の活動助成	18,140,417	68件の調査研究や活動を支援
計	77,000,429 円	

※支援項目の「その他」には、2016年4月熊本地震で被害を受けた牧野に対する緊急支援約330万円が含まれる。

2017年度までに、合計で約7,700万円の活動助成を行ってきました(下表)。表中の支援項目「その他」には、2016年4月の熊本地震発災を受けた緊急支援約330万円が含まれています。

また、表で示した直接的な活動支援の他に、草原再

生に関するシンポジウムやフォーラム開催等、普及啓発活動へも募金を活用しています。

以下では、主な支援項目毎に、6つの活動事例報告を紹介していきます。

<2016年度緊急支援一覧>

	実施団体	実施内容	総事業費(円)	支援費(円)
阿蘇市	西湯浦牧野組合	被災した放牧地内の幹線道路復旧	2,613,000	500,000
	西湯浦草原再生委員会	被災したポンプ施設の修復	594,000	360,000
	一区牧野組合	被災した牧野内の水道施設の修復	544,681	500,000
南阿蘇村	下礮牧野組合	被災した放牧地内の水槽の設置	452,520	441,720
	下市牧野組合	被災した牧野内の道路復旧と柵張り	637,140	500,000
西原村	小森原野組合	被災した牧野道の復旧	2,253,926	500,000
	出の口牧野組合	被災した水飲み場と柵の復旧	1,848,733	500,000

2. 支援項目：熊本地震緊急支援の活動

2016年4月に発生した熊本地震は、阿蘇の草原に大きな爪痕を残しました。特に草原の管理道路(牧道)や水道施設周辺が被災したことで、野焼きや放牧が困難となりました。このような状況が長く続けば、草原維持が危うくなります。そこで、被害の大きかった牧野を対象に緊急的な支援を行いました(上表)。

これらの活動のうち、8月の募金報告会では、特に被害の大きかった西原村の組合よりご報告いただきました。



[活動事例報告①：西原村小森原野組合]
「牧道の災害復旧」報告者：片山明人組合長



小森原野のある西原村は、阿蘇くまもと空港からは車で10分くらい、阿蘇の玄関口に位置しています。2016年の熊本地震では、村は大変な被害を受け、原野内でも土砂崩壊や陥没が多数発生しました。

牧道(管理道路)4kmのうち、斜面崩壊したところが236m、道路面の破損箇所がのべ200mあり、これらの道路復旧が早急に必要となりました。復旧工事は、基本的には現物支給で、重機をリースして、

組合員総出で作業を行いました。バケットでの資材(コンクリート)運搬に大変時間がかかりましたが、約440mの補修ができて、放牧の継続と来年春の野焼きの実施が可能となりました。これらの活動費としては、草原再生募金から50万円、キリン絆プロジェクトから150万円、被災牧野復旧実証事業から約150万円の支援をいただき、組合の自主財源約25万円を追加して、計375万円となりました。



西原村の牧野は、牛の放牧だけに留まらず、村民の憩いの場や観光資源としても活用されています。3月下旬には全国的に珍しい夜の野焼きと山ノ神まつりを見ようと県内外から大勢の方が訪れます。復興した牧野を将来の世代に引き継ぐために、これからも野焼き等、継続した取り組みを行い、阿蘇の環境維持に努めて参りたいと思います。ご支援どうもありがとうございました。



小森原野の放牧状況（2018年7月撮影）

3. 支援項目：野焼き放棄地の再開活動

野焼きを止めたために樹林化が進む地域で、野焼きを再開し草原を再生する活動の支援は、2011年度より阿蘇郡市の6牧野、計132haを対象に行ってきました。

報告会では、2013年度から4年間募金の支援を受けた阿蘇市の西湯浦牧野の事例をご報告いただきました。「野焼き再開」は、牧野毎に異なる経緯や現状がある中で、多くの調整を伴う取り組みです。ご報告からは、地元組合員の方々の思いが強く伝わってきました。

[活動事例報告②：西湯浦草原再生委員会]
「西湯浦牧野(仲組・中無田原野)大規模野焼き再開事業」 報告者：今村隆孝委員長



本野焼き再開の事業地は、内牧温泉の北西に見える北外輪山の縁、南に面した急傾斜地です(下図)。もともとは干し草刈りや海苔養殖に使う海苔ミス(海苔を乾燥するための敷物)の材料となるネザサ採集に使っていた場所でしたが、昭和40年代頃から畜産の衰退、農家の高齢化、担い手不足、水産業の変革等で利用が無くなり、野焼きは行われな



くなりました。

◇活動の経緯

これまでの活動の経緯は下表のとおりです。平成23年1月に地元の総会で長老から野焼き再開の議論が出ましたが、きっかけとなったのは平成24年7月の九州北部水害でした。

この水害を受けて、野焼きをしないから樹木が育ち、大雨が降ると土砂と共に流木が集落に押し寄せて被害をもたらすのだという話になり、原野45haの野焼き再開を総会で決議しました。その後は、原野(草原)と隣接する山林所有者を調べ、野焼き再開の同意を一軒一軒取り付けていきました。それに半年程かかり、関係者は120名に上りました。なかには東京等、遠方にお住まいの方もいました。その次は保安林や国立公園に関わる手続きを行い、いよいよ現地の作業に入りました。

- ・平成23年1月 野焼き再開の議論・気運づくりに着手
- ・平成24年7月 九州北部大水害発生
- ・平成24年9月 原野45haの野焼き再開を地域決議する
- ・平成24年10月 隣接山林所有者の調査と同意取り付け
- ・平成25年8月 防火帯作成の保安林内等伐採許可申請
- ・平成25年9月 事業の名称を大規模再開事業と正式決定
- ・平成25年10月 防火帯作成開始
- ・平成26年3月 恒久防火帯の試験施工開始
- ・平成26年4月 火入れ神事・野焼き再開

◇防火帯作りと野焼き再開

半世紀近く野焼きをしなかったために、予定地は灌木林化していました。これを野焼きによって草原に戻そうというわけです。その準備である防火帯作りでは、竹林が侵入したヤブ除去を野焼き支援ボランティアにご協力いただきました。また、保安林境界ではチェーンソーを使うため、地元の熟練者で作業を行いました。最も危険な急傾斜地の作業は自衛

隊 OB の隊友会にご協力いただきました。こうして全長 2.3km の防火帯が完成。平成 26 年 4 月に火入れ神事を行って、45 年ぶりの野焼き再開となりました。



◇これからの課題

本野焼き再開では、行政の長や企業からのバックアップ等、官民の協力や応援によって野焼き再開へ向けた地元の機運が高まり、事業を前進させる力となりました。しかし、事業 2~3 年目となると、い

かに継続していくかが課題となります。そこで、地元の若者を担い手として取り込むため、まずはみんなで集まって農業体験等の研修を始めました。野焼き再開から今年 5 回目の火入れとなり、灌木がずいぶん減って草原らしくなってきました。

再開から 5 年目の火入れ

しかし、まだあと 10 年はかかると思っています。そしてその過程で、ボランティアや地元の若手を取り込んでいくことが大事だと感じています。



4. 支援項目：繁殖あか牛導入助成

募金による助成支援がスタートした 2011 年度より、草原における放牧頭数を維持または増やすために、繁殖あか牛導入助成に継続して取り組んできました。2015 年度以降は、阿蘇地域世界農業遺産基金の協力も得て、年間 60~80 頭、一頭当たり 6 万円の助成金を交付しています。これまで計 481 頭の繁殖あか牛が助成を受けて導入されました（右表）。

しかし、2016 年に熊本県が実施した調査結果からは、阿蘇地域の牧野における牛（黒牛含む）の放牧頭数は、減少の傾向がやや緩やかになったものの引き続き減っています（右下表）。これは、高齢化と後継者不足による繁殖牛飼育農家の減少が主な理由と考えられます。一方で若い後継者や新規就農者による増頭も散見されています。報告会では、若手の畜産家にこれまでの取り組みと将来の展望をお話いただきました。



の牛が売られることになった訳ですが、2 頭はそれぞれ阿蘇草原再生募金の第 1 弾と第 2 弾の助成を受けて導入されたものだったため、2 頭一緒に引き受ける農家でなければ売れないとのことでした。その牛を私は買いました。そして、2013 年度の第 3 弾助成を受けて 1 頭増頭し、父から独立のお祝いとして孕み牛を 1 頭贈られ、計 4 頭からの繁殖牛経営のスタートとなりました。そんなわけで、この募金による助成に何か縁のようなものを感じています。

2014 年に 4 頭から一気に 10 頭となったのは、これまでの施設園芸主体の経営から、牛をメインにしてがんばりたいと思い、父から 5 頭の孕み牛を譲り受けたためです。2015 年度からは複数頭の助成が受けられるようになり、2 頭申請しました。そしてラッキーなことに、この年あたりから牛の値段が高騰し始め、ピークは 2016 年だったと思います。ただ、

[活動事例報告③：南阿蘇村下野牧野組]

「繁殖あか牛導入活動」報告者：塚元健太郎氏

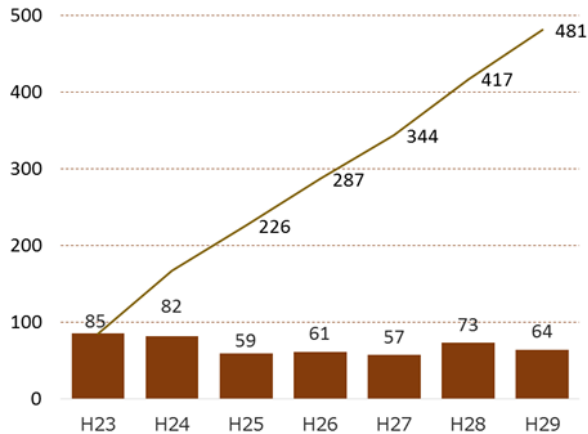


2013 年より、畜産業を営む父とは別に牛を飼い始めました。そのきっかけは、南阿蘇の畜協で 2 頭の牛が競売にかけられたことでした。白水地区の農家さんが亡くなってその方

高齢の牛に種がつかなくなったため手放し、予定通り増頭できない年もありました。今年は2頭増して16頭に、将来は20頭まで母牛を増やしたいと考えています。

あか牛がいて、放牧ができて、牛が草を食べて、野焼きが安全にできる。このサイクルのどこかが抜けると上手くいかなくなるのではと思います。今後とも野焼き、放牧、そして牛の増頭目標に向けてが

＜繁殖あか牛導入助成頭数の推移（頭）＞



んばっていきます。私を含め若手農家は、この助成

でとても助かっていると思うので、今後ともよろしくをお願いします。

＜繁殖あか牛導入助成頭数の推移（頭）＞



＜塚元氏の繁殖牛増頭経緯＞

年度	助成頭数	保有頭数
第3弾(2013年度)	1頭	4頭
第4弾(2014年度)	1頭	10頭
第5弾(2015年度)	2頭	13頭
第6弾(2016年度)	2頭	14頭
第7弾(2017年度)	2頭	14頭
第8弾(2018年度)	2頭(予定)	16頭(予定)

5. 支援項目：草原環境学習活動・担い手づくり

募金による助成支援のなかで、将来の担い手となる子どもたちの学びや、新しい取り組みの基礎となる調査研究等を支える区分です。これまで、地元小中高生の草原環境学習、若手農家の意見交換会開催、草原の保全活用システムを検討する基礎研究等、多岐にわたる活動を支援してきました。

なかでも、阿蘇中央高校生が毎年取り組んでいる草原学習と草原維持活動は、先輩から後輩へ引き継がれながら進化しており、草原保全と利活用の将来性を感じさせます。また、熊本地震後の草原の現状を空からの映像で見せてくれたドローン撮影は2017年度の活動です。



◇活動のきっかけ

農業と環境の授業で草原は遷移を止めることで維持されることを学びました。調べていくと草原にはヒゴタイやキスミレ等、希少な動植物が多く生育生息していることがわかりました。しかし、農業従事者の減少や高齢化で約100年の間に草原面積は半分まで減少しています。このままでは伝統的農業や生物多様性、草原景観が失われてしまうことに危機感を感じました。

〔活動事例報告④：熊本県立阿蘇中央高等学校〕

「草原再生プロジェクト～阿蘇の草原を未来へ～」

報告者：グリーン環境科 草原再生班

高橋健太 藤井優成 伊藤大智

吉良太希 塚本匠

(指導) 鳥江太介教諭

◇活動対象地と課題の設定

フィールドワークを行う中で、一カ所の荒地地を見つけました。立ち枯れたススキや雑木が多く見られ、地元牧野組合に確認すると、以前は放牧していたが後継者不足で手入れを止めてしまったとのこと。そこで許可を得て、この場所の再生に取り組むこととしました。

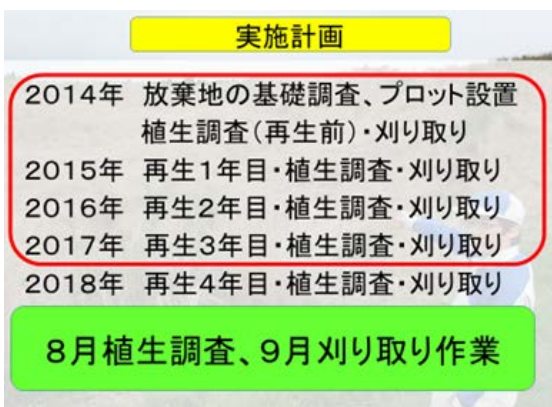


はじめに、目標を「持続的な草原の保全」と定め、以下の3つの課題を設定しました。

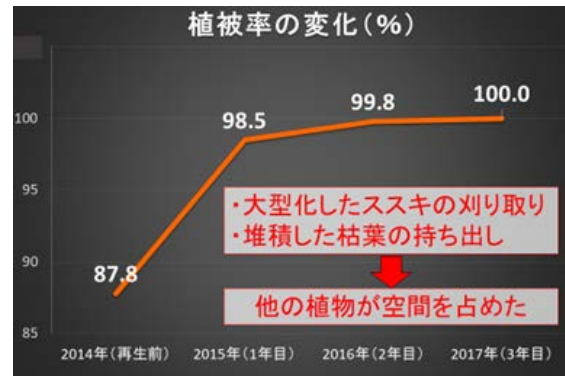


◇取り組み ①放棄地の再生・保全

再生地は、阿蘇市波野の放棄後7年目の草原。2014年度から活動を始め、毎年8月に植生調査と9月に草の刈り取り作業を行いました。今回、結果を報告するのは赤囲みの部分です。



植生調査では、群落高、被植率、種毎の被度・群度を測定しました。以下は調査の結果です。



出現種は、再生活動前の45種から、48種、57種と増加しています。活動前には見られなかった23種が新たに確認されました。

また、再生地の生物多様性を評価するため、シャノン指数を算出しました。指数は再生活動前の2.04から、活動後2.42、2.38と推移しており種多様度が高くなったかと思われましたが、西日本農業研究センターの高橋佳孝先生からは「誤差の範囲です。もう少し調査を続けてみてください」との助言をいただきました。結果を急がず、時間をかけて取り組まなければと反省したところです。

◇取り組み ②草資源の活用

再生地では草の刈り取りを続けていますが、未利用のススキを資源として活用できれば持続的な保全



につなげることができます。そこで、ススキの利用法を調べたところ、様々な用途があることがわかりました。私たちはそのうち、屋根材としての利用に着目しました。

阿蘇茅葺工房の植田さんに相談したところ、再生地のススキを利用した茅葺きの指導をいただけることになりました。作業は、以下の実施計画にそって進めました。

実施計画	
4月	課題設定・計画検討
5月	測量、製図
6月	杭打ち、スギ伐採・皮剥ぎ
7月	丸太の搬出・製材
8月	スギ皮天日干し・重石のせ
9月	足場組み立て
10月	足場組み立て、茅の準備
11月	屋根の基礎組み立て
12月	かやぶき完成、反省・評価

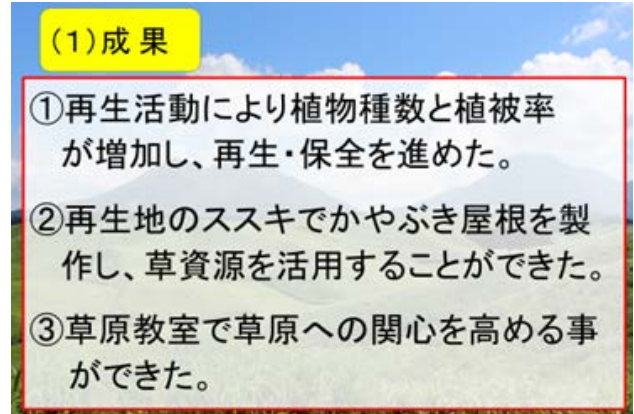
材料として足場を作る 20 本のスギ材、屋根材となる 300 束の茅を準備しました。足場を組み立てて、いよいよ茅葺き開始。植田さんの指導を受けて作業しました。1 段、2 段、3 段と上方へ茅を敷きつめていき、全二層、厚さ 50 cm の茅葺き屋根が完成しました。私たちはこの場所を「かやぶきテラス」と命名しました。指導いただいた植田さんからは、「じいさんの代から守ってきた伝統技術ば、次は君たちに守ってもらいたい。」との思いを伝えられました。



そこで、子どもたちを招き草原教室を開催することとしました。クイズや体験を通して、草原への関心を高めることができました。

◇成果と課題

本活動を通じた成果は以下のとおりです。



今後の課題としては、①生物多様性の検証、②地域ぐるみの活動へしていくこと、③茅の商品化が挙げられます。

本活動を地元テレビ局の放送や世界農業遺産 HP への動画掲載を通して情報発信したところ、様々な応援や賞をいただき、今後の励みとなりました。受け継がれてきたバトンを未来へつなぐために、私たちの活動は続きます。



〔活動事例報告⑤：南阿蘇村長野良市氏〕
「ドローンによる阿蘇草原の撮影」



2016年熊本地震発生直後の7月、赤い羽根共同募金会からの支援を受けてドローンを購入、私と息子とで飛ばす作業をはじめました。地震後

はじめは地上で撮影をしていたのですが、ここから先にはどうしても行けないという状況が多数あって、では空からということでセスナを使いました。しかしセスナはどうしても高度がありすぎて、低空からの草原の被害状況の把握が必要でした。そこでドローンの利用となりました。しかし撮影の過程で、所有していたドローン5機のうち3機が墜落しました。2機は風の影響、1機は鳥の襲撃を受けそのまま行方不明です。

募金による取り組みとしては昨年の秋口から草原を撮影する予定でしたが、雪が多かったこともあって遅れ、最終的には野焼きまでに撮影することとなりました。撮影場所は、二重の峠、大観峰近くの北外輪山、地獄・垂玉温泉裏の烏帽子岳南山麓から御竈門山周辺、阿蘇谷の内側から跡ヶ瀬地区周辺、それぞれ1時間以上飛ばして撮影しました。この成果を協議会の皆さんにぜひ使っていただければと思います。(事務局注：長野さんからは各地区7分程度



に編集した動画と写真データを募金事務局へご提出いただいています。阿蘇草原再生協議会の活動に活用することが可能です。)

6. 支援項目：生物多様性保全活動

多様な動植物の生育・生息地となる草原の保全については、当初から募金による支援項目のひとつでした。これまでに支援を行った取り組みとしては、野生動植物等の調査研究に関するもの、採草利用を促進し多様な草原の創出に貢献する活動等があります。

報告会では、草原の再生過程の解明に取り組まれている増井太樹氏に、これまでの調査研究成果についてお話しいただきました。

〔活動事例報告⑥：岡山県 増井太樹氏〕
「野焼き再開原野モニタリング調査および斜面崩壊後の植生の変化」

2015年に開催された1回目の募金報告会で、本日野焼き再開事業のご報告をされた西湯浦牧野での



植生調査についてお話しましたが、この調査地は熊本地震で土砂崩壊が生じたため、現在は規模を縮小して継続中です。

このように阿蘇地域では豪雨や地震などでたびたび斜面崩壊が発生していますが、そういう場所

が再び草原に戻ることは地元の方の間では経験的に知られています。そこで以下の疑問がわいてきます。

◇調査研究の着目点

- ①どれくらいの時間で草原が成立するのか
 - ②植物の種組成はどのように変化するのか
- という疑問です。これらについては明らかになっていないと考えられますので、この2点に着目して研究を行いました。

◇調査方法

明らかにしたいのは、斜面崩壊後の植生遷移過程ですから、ポイントは「異なる年代の斜面崩壊地を見つけること」です。そんな場所が、東外輪山に広がる町古閑牧野にありました。

調査地と方法



- 調査地：町古閑牧野
異なる年代に発生した斜面崩壊地
●2012年 ●1990年 ●1990年以前から崩壊無し
- ・調査地周辺は半自然草原として毎年野焼きを実施
 - ・既存調査および記録写真より斜面崩壊地の位置を特定
 - ・それぞれの地点で1×1mの植生調査を30カ所実施（1年代につき90カ所 計270カ所）

以下の3つ時期の写真を比較してみると、1990年崩壊地は1995年には緑色にかわっており、2016年には一見すると崩壊したことがわからないくらいに回復しています。他方、新たな崩壊も発生しているので、阿蘇の草原は崩壊と再生を繰り返しているのだらうと思います。

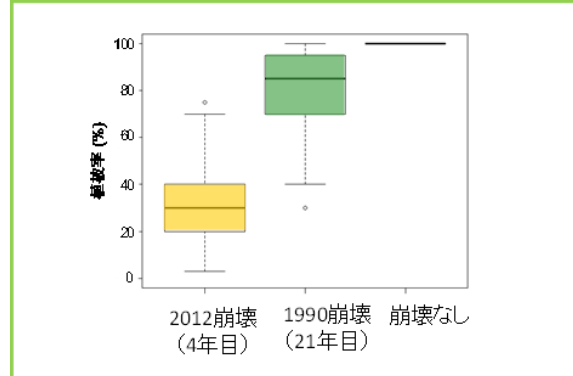


※1990年と1995年の写真は
大滝典雄先生撮影

1m×1mの植生調査を計270地点で実施した結果は以下のとおりです。

崩壊から21年経つと90%くらいまで植被率が回復しています。

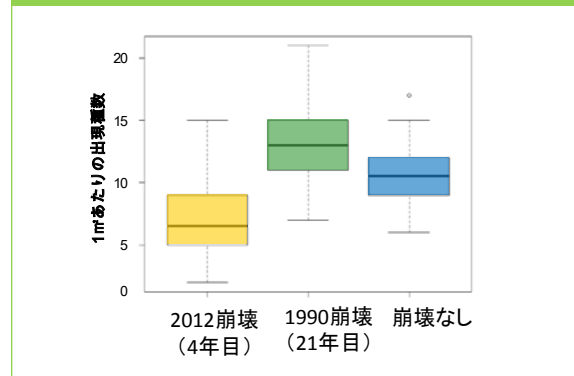
崩壊年代ごとの植被率



では種数については、どうでしょうか？

崩壊から4年後の斜面では7~8種しか戻っていません。それが、21年経つと種数が増えて、崩壊なしの場所よりやや多くなる結果でした。このように数字だけで考えると、崩壊から年数が経ち出現種数が増えて良い草原に近づいていると思われます。

崩壊年代ごとの1㎡あたりの出現種数



さらに、それぞれの年代で特徴的に出現する植物について解析してみると面白い結果が見えてきました。

左下図のように、特徴的に出現する種は年代によって異なっていました。たとえば、崩壊21年目の斜面には、オミナエシ、ユウスゲ、サイヨウシャジンなど採草地（草刈り場）と共通の多くの植物がみられました。つまり、崩壊直後から植物の種数が徐々に追加されて増えていくのではなく、崩壊後の植生復元過程において種の入替わりがあることがわかりました。それを模式的に表したものが以下の図です。

それぞれの年代に特徴的に出現した植物

2012年に崩壊（4年目）

・スギナ ・オトコヨモギ

1990年に崩壊（21年目）

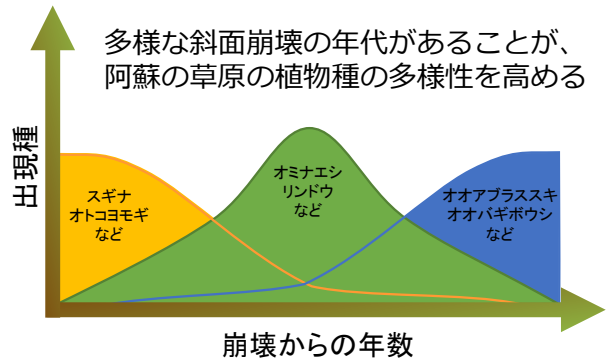
・ヤマハギ ・トダシバ ・オミナエシ
 ・ユウスゲ ・リンドウ ・カワラマツバ
 ・シラヤマギク ・オカトラノオ
 ・サイヨウシャジン など

崩壊なし

・ススキ ・オオアブラスキ ・ウンゼンザサ
 ・ヒメノダケ ・ホソバシュロソウ など

斜面崩壊は災害につながる場合も多く、裸地を早急にススキ等で緑化しようという話になりがちですが、崩壊後、最初はスギナ・オトコヨモギ、続いてオミナエシ・リンドウ、その後にオオアブラスキ・オオバギボウシなどが優占し、入れ替わることで、阿蘇の草原の多様さは保たれていると考えられます。

まとめ：斜面崩壊後の種組成は次第に変化



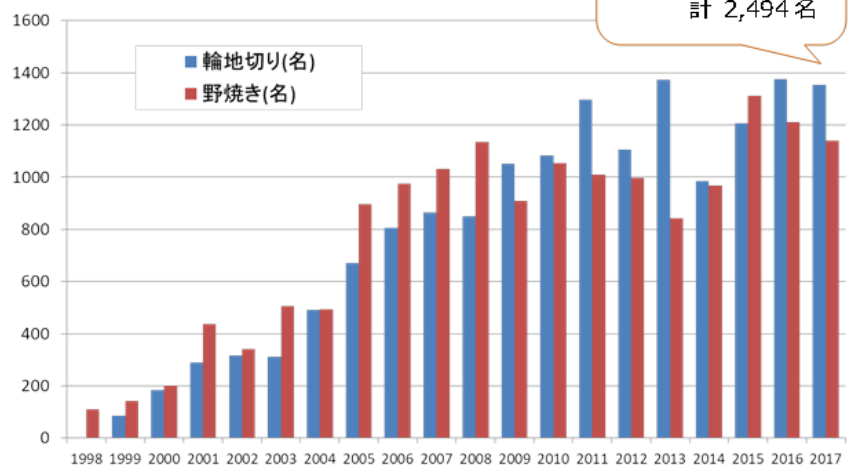
自然にとっては、斜面崩壊も多様さをもたらす一つの要素だとわかりました。

最後にこの研究は貴重な募金の助成を受け、草原を維持されているの方々のお陰で実施できました。皆様に感謝申し上げます。

7. 支援項目：野焼き支援ボランティアの養成と派遣

今回の募金報告会では、野焼き支援ボランティアの養成・派遣支援について、詳細のご報告は行いませんでした。最初に募金活動の概要報告のところで、右のグラフをお示しし、派遣数は比較的順調に推移していることをご説明しました。

<野焼き支援ボランティアの推移>



<意見交換会：草原を残していくために募金をどう活用するか>

6名からの活動報告を受けて、阿蘇草原再生募金委員会（募金の活用について助言する組織）の坂本正委員長をコーディネーターに、会場にお越しの募金協力者の方々、協議会構成員、そして報告者を変えて、「草原を残していくために募金をどう活用するか」をテーマに意見交換を行いました。以下に、その概要をご紹介します。

【景観や自然環境に配慮した取り組みを】
 ○山腹の緑化にクズ（葛）や外来種を使うことがあ

る。使うときは用いる種をよく検討してから取り組んで欲しい。

○観光道路沿いの雑木林をなんとか草原に再生して欲しい。

【野焼きを続けるために防火帯の整備】

○機械を入れて造成し種を蒔くなどして防火帯が作れないだろうか。

【草原をもっと活用する】

○あか牛を増やしたり堆肥を作ったり、草原の活用を増やす方向にアイデアや資金を出す。

【応援の輪を広げる】

- 草原再生の取り組みをもっと広く広報し、応援してくれる人を増やす。
- 野焼きボランティアについてもっと広報を。

【草原学習を広げる・後継者を育成する】

- 地元の若手育成、後継者育成に力を入れる。
- 地元の営みをどう繋げていくか、そこにギアチェンジを。



- 若い人たちに草原の素晴らしさを伝える。
- 熊本市や他の地域にも草原学習の場を広げ、実態を知ってもらう。

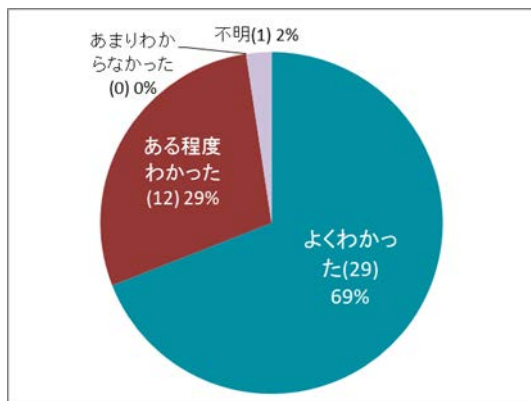
まとめ：

阿蘇の草原を守り、阿蘇の農業を守り、生物多様性を守り、各々の生活を守っていくということは、世界の文化遺産に相当するような大きな営みだ。生活を守っていくということが、日本の農業の原点であり、それを募金で支えようとしている。若い人の育成や後継者づくりが、これからの課題となるだろう。

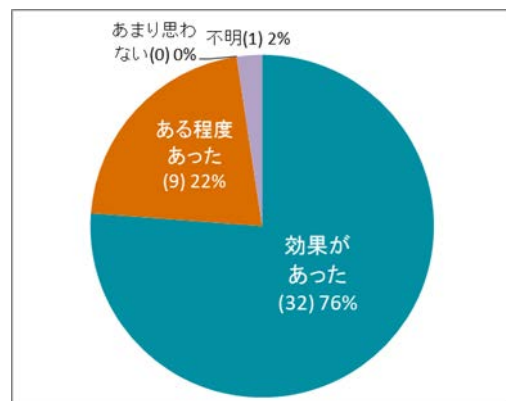
＜来場者アンケートのまとめ＞

アンケートの回答数は 42 通でした。回答からは、募金の活用についてご理解が広がり、募金助成によって草原再生への効果があったと多くの方に感じていただけたようです。

活動報告の中では特に中央高校生の発表が良かったと挙げる方が多く、あわせて後継者の育成に力を入れていく必要性を指摘されています。また、草原再生活動の広報をもっとするべきというお声も多数でした。



Q. 募金がどのように活かされてきたのか、ご理解いただけましたか？



Q. これまでの募金による助成について、草原再生効果や意義があったと思いますか？

全国草原リレー（第19回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第19回

は、理事でもある笹岡氏に、最近の取り組みについて紹介して頂きます。

上ノ原の野焼き 15年

（笹岡達男：ネットワーク理事／東京都在住）

現執筆陣による草原リレーもいよいよ4周目。毎回「もう回ってきた」と寝言をいっていますが、2012年のリレー開始から概ね2年毎にバトンが回ってきます。

今回は、森林塾青水の活動拠点である群馬県みなかみ町の上ノ原草原の話題です。今年、2004年に上ノ原での野焼きが40年ぶりに復活してから15年目を迎えたこともあり、この機会にその経緯を簡単に振り返ってみたいと思います。

上ノ原は、上越新幹線の上毛高原駅から車で約1時間、標高1050mの高原にあります。かつては200haに及ぶ草原と森林が、地元藤原中区集落の人々により、屋根葺き用の茅や刈敷き等の農業資材あるいは燃料用の薪炭林として入会利用されていました。しかしこの地域でも生活・生産様式の変化に



残雪のない野焼き—防火帯と火消し部隊が活躍—（2016年）

伴いこうした利用が衰退し、周辺よりゴルフ場、スキー場等のリゾート開発が進んだことで、旧入会地（町有地）は21haにまで縮小し、現在はススキ草原とミズナラ二次林がおおよそ半分ずつを占めています。

2000年に発足した森林塾青水が、この上ノ原と出会ったのは、「現代版『入会慣行』を考える集い」を始めていた2002年のことです。旧水上町在住の会員が取り持った縁で、当時の水上町役場から遊休町有地活用を提案され、翌2003年には上ノ原草原を無償で借り受ける契約が整いました。以後森林塾青水はこの上ノ原を主たる活動フィールドと位置づけ、地元藤原地区の皆さんと意見交換を重ね、草原（茅場）の再生、生きもの調査、フットパス（古道）の整備など、生物多様性の保全と持続可能な利用を進めながら、地域活性化への寄与も目指す活動を続けています。

活動当初に地域の古老との話しの中で、かつての茅場野焼きのやり方やその復活への思いを聞かされ、種々の準備のもとに実現したのが、2004年4月、40年ぶりの野焼き復活でした。当地の野焼きのやり方は、「雪間を焼く」と言って、残雪を防火帯代わりに活用し延焼を防ぎながら行うのが普通だったとのこと。重労働を伴う夏場の防火帯づくりを省けるという意味で、雪国ならではの伝統の知恵と言えまし



40年ぶりの野焼き（2004年）



雪間を焼く（2010年）



こんな年もありました（雪中の神事：2010年）

よう。しかしこれを現代版のイベント仕掛けで行うには、毎年の残雪・雪解けの状況を見ながらの日程設定が鍵となります。残雪が多い年には、あらかじめ重機での除雪をお願いして野焼きスペースの確保と雪の防火帯づくりを行う必要もありました。逆に雪解けが進みすぎて乾燥状態となると周辺森林への

延焼が懸念されます。実際この15年間の経緯（別表参照）を見てもわかるように、残雪状況を踏まえた日程延期や、当日気象条件による順延、延焼懸念等による中止がたびたび生じています。近年では、当地の知恵や伝統に加え、各地で行われている防火帯整備や、火引き（火付け）の方法などを学びながら、残雪のない状態でも安全な野焼きを実施できるよう研鑽を積み、地域や行政関係者の理解を得ながら進めています。

今後は、上ノ原の草原と生物多様性の維持のために、野焼き（及び秋の刈り取り）がどのように寄与しているのか、また当地のススキは引き続き重要文化財等の茅葺き屋根材として利用されていることから、その品質の確保のために何が重要なのか等について、さらに実践を通じた研究を進めていく必要があるでしょう。

表 上ノ原野焼き復活後の経緯（データ等は「茅風通信」による）

年	月日	曜日	着火時刻	実施面積	参加者概数*	備考
2004年	4月18日	(日)	11:00~		47人	40年ぶりの野焼き復活
2005年	4月30日	(土)	午後		85人	4/23の予定を降雪のため延期、山の口開け(神事)を復活
2006年	5月6日	(土)	午後		80人	4/29の予定を降雪のため延期
2007年	4月14日	(土)	14:30~		100人	
2008年	4月27日	(日)	午前		140人 (2日間)	4/26雨天のため順延、初日は神事及び侵入木除伐
2009年	4月18日	(土)	15:00~		100人	
2010年	4月25日	(日)	午前		150人 (2日間)	4/24降雪のため順延、初日は神事及び野焼き学習会
2011年	4月17日	(日)	13:10~		97人 (2日間)	4/16降雨のため順延、初日は神事及び除伐
2012年	4月28日	(土)	—		33人	放射能対策のため野焼き中止、神事及び防火帯づくりのみ実施
2013年	5月11日	(土)	—		39人	近隣山火事頻発のため野焼き中止、神事及び防火帯づくり
2014年	4月26日	(土)	14:40~	2ha	82人	3年ぶりの実施、防火帯も準備したが残雪多い中での実施
2015年	4月25日	(土)	14:10~		70人	残雪多い、岐阜大津田研による温度等データ測定実施
2016年	4月16日	(土)	午後	0.6ha	30人	残雪なしのため初の防火帯方式で野焼き、岐阜大コラボ継続(以後毎年)、消防団応援あり
2017年	4月30日	(日)	10:30~	0.5ha	68人	4/29降雨のため順延、残雪多し、初日は神事と準備作業
2018年	4月30日	(月)	9:30~	2.1ha	65人	残雪なし、前日は防火帯整備など準備作業、当日は消防団応援あり

*参加者概数には報道陣、見学者等も含む。2日間の場合は延べ人数

草原をめぐる動き (2018年10月～2019年1月)

- 10/6 自然観察交流会⑦ (場所: 山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 10/7 草原の復元作業 2～セイタカアワダチソウの 駆除作業 (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局)
- 10/7 秋吉台お花畑プロジェクト 2 (場所: 山口県美 祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台草原ふれあいプロジ ェクト事務局)
- 10/14 草原保全体験ツアー (ボランテイズム) (場 所: 熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センタ ー、連絡先: 阿蘇グリーンストック) (11/1、11/11 にも開催)
- 10/20-21 錦秋の茅場で茅刈り&ボッチづくり (場 所: 群馬県みなかみ町上ノ原、連絡先: 森林塾青 水)
- 10/20 カヤネズミがすむカヤ原復活プロジェクト 2018 第4回「カヤネズミのすむオギ原を歩いて 秋を楽しもう!」(場所: 京都府 桂川河川敷、連 絡先: 全国カヤネズミ・ネットワーク)
- 10/26-27 信州小谷 茅刈り・茅葺き体験ワークショ ョップ (茅刈り技能研修<専門家向け>) (場所: 長野県北安曇郡小谷村、連絡先: 日本茅葺き文化 協会)
- 10/27-28 信州小谷 茅刈り茅葺き体験ワークショッ プ (茅刈り茅葺き体験<一般向け>) (場所: 長 野県北安曇郡小谷村、連絡先: 日本茅葺き文化協 会)
- 11/3 自然観察交流会⑧ (場所: 山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/10-11 茅刈り茅葺きワークショップ (場所: 福島 県南会津郡下郷町大内宿、連絡先: 日本茅葺き文 化協会)
- 11/10-11 われらが紡ぐ 白川郷かややねプロジェク ト～秋の一斉茅刈り～ (場所: 岐阜県大野郡白川 村、連絡先: 日本ナショナルトラスト)
- 11/17-18 茅ボッチ運び出しと山之口終い (場所: 群 馬県みなかみ町上ノ原、連絡先: 森林塾青水)
- 11/18 八幡高原の野鳥観察会 (場所: 広島県山県郡 北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究 会)
- 11/23 草刈りボランティア (場所: 山梨県山梨市牧 丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/23 千町原 秋の草刈り (場所: 広島県山県郡北広 島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 11/30 茅金市場 (場所: 広島県山県郡北広島町、連 絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 11月末 茅刈り体験会 カヤカル 2017@美山砂木(場 所: 京都府南丹市美山町高野地区、連絡先: 茅葺 屋)
- 1/12 野焼き支援ボランティア 2017 年度初心者研 修会第1回 (場所: 熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原 保全活動センター、連絡先: 阿蘇グリーンストック) (1/20、2/2、2/6に第2回～4回あり)

※上記以外の情報もホームページで随時公開してい ます。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 36 2018年10月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 鳥根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】10月に入ると、ススキの穂が出揃い、草原も本格的な秋のよそおいを呈してきました。各地で茅刈り体験や茅葺き体験など、草原の茅を使った催しも行われるようです。また阿蘇では、草原保全の体験ツアーが行われる予定です。都市域からの人手により草原を保全する仕組みが試行されており、その成果に期待がかかります。